

石川・久昌寺遺跡

きゅうしょうじ

1 所在地 石川県金沢市安江町

2 調査期間 一九九六年（平8）八月～十二月、二一九七七年四月～六月

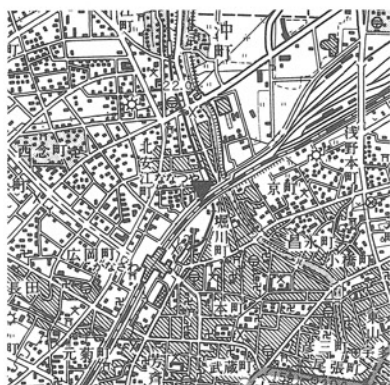
3 発掘機関 金沢市埋蔵文化財センター

4 調査担当者 増山 仁

5 遺跡の種類 墓地跡

6 遺跡の年代 江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（金 沢）

久昌寺遺跡は金沢城下町の北西端、城下北部を流れる浅野川にはど近い場所に位置する。久昌寺は曹洞宗の寺院で、加賀藩二代藩主前田利長正室玉泉院の生母の菩提所として、縁者の明巖を開祖に慶長一五年（一六一〇）に建立されたと伝える。

調査地は久昌寺の墓地にあたり、上下の二層が確認

できた。下層墓地では主に円形木棺墓と甕棺墓が使用されており、一七世紀後半から造墓が開始され一八世紀まで継続している。上層墓地は方形木棺墓が中心となり、一八世紀末から一九世紀初頭にかけて形成された。被葬者は由緒帳から中・下級武士層と確認できる。木簡は、第一次調査において、円形木棺の蓋板や側板に墨書のあるもの九点、甕棺の蓋板に墨書のあるもの三点、方形木棺墓の底板や蓋板に墨書のあるもの二点、将棋の駒などの副葬品二四点、及び遺構外から一点の計三九点が出土した。また、第二次調査において、五・六号方形木棺墓わきから一点、土坑SK〇一から一点、溝SD〇四から七点、遺構外から一二点の計二二点、総計六〇点が出土した。ここではそのうち主要なものを紹介する。

8 木簡の釈文・内容

一 第一次調査

四号円形木棺墓

(1) a 「里

観

如

作

応

一

切

有

為

法」(蓋板)

2675×177 061

(1) b 「前」(側板)

上部径646×底径517×高742 061

三四号円形木棺墓

(2) 「南無阿弥陀仏」(蓋裏)

径512×厚13 061

五四号円形木棺墓

(3) ・「前」(側板)

・「後」(側板)

上部径448×底径354×高517 061

五六号円形木棺墓

(4) (鏡文字)
「首」(蓋裏)

径639×厚3.5 061

六三号円形木棺墓

(5) a 「迷故三界城悟故十方空
本来無東西何処有南北」

(蓋板) 603×613×17 061

(5) b 「前」(側板)

上部径480×底径596×高617 061

七六号円形木棺墓

(6) 「。萬松間柳
信女」

136×82×4 065

八一号円形木棺墓

(7) ・「河北十郎兵衛様 □田内助」

・「田内助次郎
御紋者 (家紋)」

178×64×7 061

八五号円形木棺墓

(8) a 「

此國身何處有南北

迷故三界城

悟故十方空
(他二モ墨書多数アリ) (蓋板)

径686×厚12 061

(8) b 「前」(側板)

上部径653×底径538×高755 061

一号壙棺墓

(9) 「

114×56×1 011

一八号窆棺墓

(10) 「前 前」(蓋板)

径752×厚2.4 061

一一号方形木棺墓

(11) ・南無あみだぶ×

・つうせんいんしやうかく

(150)×23×0.1 081

一三号方形木棺墓

(12) a 「卍」(他ニモ墨書多数アリ)(蓋板)

713×1110×14 061

(12) b 「(合掌)」「白仏」「尊」ナド鏡文字多数アルモ判読不能」
(底板)
1000×640×20 061

一八号方形木棺墓

(13) 「如□□□是□□□

〔羅カ〕「四月廿九日」

「波□密經」

□□□□

□於

「□□持日布施

說七日」

□故□□

「南無量阿僧□世□」

□□(底板内面)

(他ニモ墨書アリ。異筆部分ハ鏡文字) 1108×578×6 061

一九号方形木棺墓

(14)

「千々之□
□□□□
□□□□

58×40×1.5 011

二九号方形木棺墓

(15) ・「通

寛永
宝」

・「文」

径28×厚5 061

七二号方形木棺墓

(16) 「南無妙×

径58×高14 061

九六号方形木棺墓

(17) 「金将」

27×23×11.5 061

(18) ・「銀将」

27×24×9.5 061

・「金」

(19) ・「桂馬」

・「金」

25×20.5×9.5 061

(20) ・「香車」

・「金」
25×19×9 061

(21) ・「歩兵」

・「と」
22×16×7 061

遺構外

(22) 「古屋三郎兵衛」
(130)×(16)×3 081

棺の蓋板と側板など複数の部材に墨書がある場合は、木製品としては一体と見なして単一の木簡番号を付した上で、各部材をa・bで区別した。

(1)～(10)は一七世紀後半から一八世紀、(11)(12)は一八世紀、(13)～(21)は一八世紀末から一九世紀初頭にかけての遺物である。

(1)a、(2)(4)、(5)a、(8)aは円形木棺の蓋で、(2)(4)以外は蓋の表側に文字が見られる。(1)aと(8)aは「正」を中心として放射状に五字ずつ文字が書かれている。(1)aと同じ墨書をもつ円形木棺の蓋板は、二六号円形木棺墓からも出土している。また、(8)aと同じ墨書をもつ甕棺の蓋が五号甕棺墓から出土している。(1)bと(3)は円形木棺側板で、胴上部に文字が書かれている。

(6)(9)(11)(14)は板状を呈する。(6)は長方形板の上部二カ所の角を取り、

下部は左右を緩くカーブを描くように削つてある。底部は尖らず平らで、上部中央に穿孔が一カ所ある。表裏ともに縁取りのように墨が塗られている。(9)は木釘が一カ所残存している。(11)は上下が折損しているため原形の詳細は不明。同文が記されていたと思われる断片が他に三点ある。(7)は箱の蓋で、表裏に文字が書かれている。

(10)は甕棺の蓋。(12)aは方形木棺の蓋で、中央に「正」が確認できるが、その他は判読不能である。(12)bと(13)は方形木棺の底板。(12)bは多数の鏡文字が様々な方向に書かれており、一部重なるものもある。判読不能。(13)は多数の鏡文字が見え、一部重なるものがある。また、紙を貼り付けた跡が三カ所あり、それぞれに鏡文字が残るが、判読不能である。このような鏡文字で残る墨書は、副葬された紙または布に書かれていた文字が転写したものであろう。

(15)は寛永通宝の木製模造品である。同様のものが全部で五点出土した。一〇～一三面の多角形に成形し円形を作り出している。中央の方孔を墨書で表現するが、中央に穿孔をもつものもある。(16)は独楽で、裏側に文字が書かれている。(17)～(21)は将棋の駒である。金将と歩兵各四点、銀将三点、桂馬と香車各一点、計一三点が副葬されていたが、一点ずつの紹介にとどめる。文字はいずれも黒漆で書かれている。

二 第二次調査

五・六号方形木棺墓わき

(1) 長瀬氏武

(282)×41×(22) 065

土坑SKO一

(2) 浜納×
仁随×

径(137)×厚4.5 061

溝SDO四

(3) ・「○小ぬし

源右衛門」

・「○小ぬし
源右衛門」

121×37×6 011

(4) [浜カ]
納豆

径145×厚4 061

遺構外

(5) 「村九□□」

60×30×6 021

(6) ・「寅七月廿五日
□□村弥右衛門」

・「上戸真□
□□□市郎左衛門」

107×49×4 011

(7) ・「(目印)佐賀野屋八郎兵衛様行□
拾壹番」

・「卯三月十八日出
□□□□」

218×(44)×10 081

(8) ・「寛政七歲卯□八月
□□

・「六

(137)×(37)×3 065

(9) 吉祥

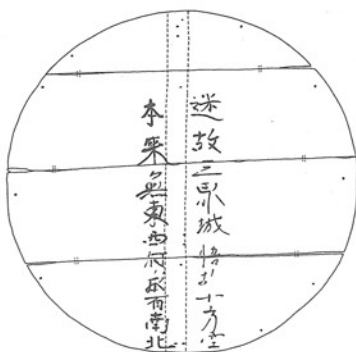
(259)×(37)×6 081

(10) 醬
超雲寺」

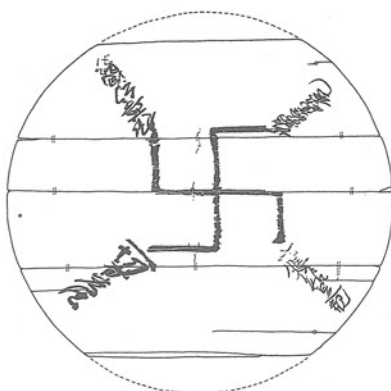
径132×厚4 061

(11) 「生姜漬」

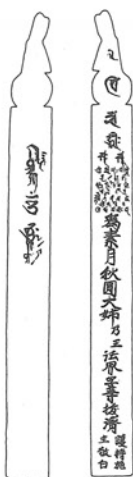
径106×厚4 061



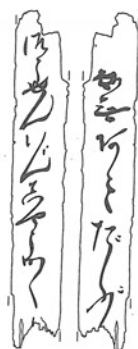
—(5) a



—(1) a



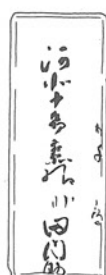
二(12)



—(11)



—(7)



—(6)



—(17)



—(15)



二(6)



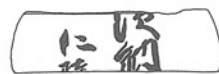
二(8)



—(18)



二(4)



二(2)



—(19)



—(20)



—(21)



二(11)



二(10)



二(7)



二(1)

•

(825) × 73 × 15 061

- 屋敷道明・宇佐美孝・袖吉正樹各氏のご教示を得た。また、二(12)の卒塔婆の梵字の釈読については、千手寺の木下密運氏のご教示を得た。

金沢市埋蔵文化財センター『久昌寺遺跡』（金沢市文化財紀要二〇七、二〇〇五年）

(新出敬子)